

# 文化高知 39

## かぐわしい文化の街づくり

川崎 昭典

高知県総合開発計画の審議を願っているなかで、ある議員から、この計画案には都市機能の充実という視点が全くないという鋭い指摘があった。言われてみるとなるほど、都市機能の充実という項目はあるが、それを正面に押し出して、高知市の都市機能を充実させることこそ、県勢浮揚の眼目なのだという議論はなっていなかった。

都市機能とは何かと考えてみると、先ず上・下水道、病院、大学、劇場、動物園、植物園、美術館、博物館等々色々なものがあるが、高知県は全国でも珍しく、一県一市というような姿となった過疎県である。市はあっても、県都たる高知市と他の市との人口差その他の格差が大きすぎる。この傾向は藩政時代からとも言えるが、大戦後の政治のあり方が著しくこういう方向を強めてきたと考えられる。

経済流通センターとしての都市、高知市があるが、生産センターとしての都市がないので、一県一市のような姿になったのであろう。

都市機能とは、豊かな市民生活を前提とするものである。豊かさを前提と

するにはもっともつと産業が興らねばならぬ。工場誘致をいうと自然を破壊するという反応が必ず出る。今の技術をもってすれば、公害のない工場が可能であり、自然破壊をせずに開発を行



田中白歩「春光」

うことも可能であるが、当面のところ、産業廃棄物の処理さえなかなかなかうまくゆかない状況にある。

私は二十一世紀を論ずる前に輝かしい世紀末を夢みたい。この二十年間、

多くの都市に美術館ができた。博物館もあちこちの都市で出来はじめている。どの県庁所在地にも、美術館や博物館があるのがよいか、分業的にこの都市には美術館、この都市には博物館というようなのがよいのか、私はかなり迷っていたが、この頃は、すべての都市に美術館、博物館の時代がくるようになるだろうと思うようになった。生涯学習の時代が来たのである。余暇を楽しく過ごすためには、県の中心部に立派な大学があるとともに、美術館も博物館もあるということにならねばなるまい。博物館は勿論、歴史博物館と科学博物館(自然史博物館)の両方である。高知市の自然には、天文、地質、植物、昆虫、いろいろの面白さがそのまま生きている。これらから機械工学まですべてを含んだ科学博物館は相当大規模なものであってよい。日本中から生涯教育のために見学者が後を絶たないような博物館が人口五十万の大高知市に出現する日は私は夢みている。その一隅には世界一の蝶のコレクションも並べられることになるだろうと。

(高知県副知事)

# 村を離れた頃から……

野町 和嘉

私の生まれは幡多郡の三原村である。中村と宿毛、清水を結んだ三角形の真ん中にポツリと孤立した山間の村である。とりたててどうということのない村であるが、清流があり森のある、貧しいなりに落ち着いた生活のリズムがあった。

中学を卒業し高知市内の高校へ行くことになったため、十六歳で親元を離れ下宿生活をはじめたことになった。一学期を終え帰郷した折のことである。鎮守の森を囲むうっそうとした森が伐り払われて、真夏の白日のもとに貧弱な社がハダカでさらされているのを眼にして言葉にならないショックを受けたものだった。わずか四カ月間離れていた間に起こったことだった。とくに理由を聞いたわけでもなかったが、鎮守の森をカネにかえたということであるらしかった。

ときあたかも、高度成長へ突進しゆく助走期ともいえる段階で、東

京オリンピックを二年後に控えて日本国中がそれまでの価値観を一変させ、経済こそすべてという風潮にだれうって走りはじめた時代であった。

それ以前にも村の共同体は急激に変質しつつあった。眼に見える顕著な現象はテレビの普及であった。それまで、これといって娯楽のない村では、人々は夜毎集まって語り明かしたり、また村祭りともなると青年たちは相当の時間をかけて踊りの稽古に費やしたものである。それがある時期から家族単位でテレビに向き合うようになった。夜毎、都会から送られてくる映像は、退屈な村の日常とは比較にならないスリリングでモダンなものばかりであった。それまでの因習に縛られていた暮しがとたんに古ぼけたものに見えてしまったのも無理はない。そうこうしているうちに祭りも簡略化され、私たちが世代はこぞって村を離れていった。

なにも三原村だけのことではない。日本中が経済効率一点ばりの巨大な渦に巻き込まれ大変革をうけた時代であった。その後ますます加速されてゆき、今やこの国は世界に類を見ない情報均一化されたカネとモノの国となつてしまった。とどのつまりは、北海道から沖縄までどこにいても人相にも差のない日本人となつてしまった。とくに子供たちがひどい。

私は写真の仕事をするようになり、世界の様々な土地を見て歩くようになった。深い信仰をもっている人々、あるいは劣悪な環境のなかで堂々と生き抜いている人間に強烈に魅せられ、どちらかというど境界地域ばかり見て歩くことが多い。振り返って日本のことを思うと、ノッペラボーで均一化してしまつてナニもかも嘘っぽく見えてきて、撮影したいという衝動がとんと起こらなくなつてきている。

まあそれにしても、なんとフワフワと軽い国になつてしまったことか……とりとめのない文章になつてしまったが、幡多の寒村での日々、そしてその変質を感じたりしたことが現在の仕事に結びつく、ちよつとした反骨精神を培つたのである。と考えている。ますます過疎化してゆく村に老いた両親をポツリと残しているということの傷みが、この仕事を持続させてゆく源泉となつていることも事実である。

五体投地で拉薩を目指す巡礼者たち



(写真家)

# 山田のかかしコンテスト

高田利光



「え、かかしって!」  
「あの、かかしかえ?」  
「たかが、あの、かかしに五十万円とは!およけないねえ……」  
何度このような会話がかわされたことでしょうか。

賞金五十万円は、県内のイベントでは聞いたことがありませんでしたので、これは自分達でも「ぶつとび!」などと感じながらの「山田のかかしコンテスト」のスタートでした。賞金五十万円、そして「かかし」というユニークさに我々の期待通り報道機関が興味を示してくれました。その後、何度かテレビ・ラジオ・新聞等で報道されることになりました



が、我々としては「刃物まつり」のメインイベントとしての「山田のかかしコンテスト」であり、何かしらかかしコンテストだけが一人歩きしていることに多少不安も感じているところでした。

刃物まつりは、当町の地場産業である鍛造業界の発展と地域活性化を目的として、昭和五十四年からスタートしています。

偶然にもこの年には、大分県の平松知事が自分の町の特産品として、全国的な評価に耐えうる一品を掘り起し、その特産品をテーマとして、地域に適した新しい産品を開発しようと呼びかけています。

そして、全国各地で一村一品運動が一大ブームとなり、あらゆる地域で新しい産品が生まれ、消えていったものも数多くあります。

幸運にも当町には、全国に誇れる四百年の伝統と歴史を持った「土佐の打刃物」がありましたので、他市町村と比較しても大変恵まれていたわけです。

一品に恵まれていたことが、安易に「まつりイベント」につながり、イベントとしての重要な意味をもつ「地域活性化のために」と言う柱はあっても、心から願い、祈り、感謝し、欲びあう、という大事な要素が欠落していたような気がします。



イベントとしてのターゲットの狭さ、範囲の狭小さゆえに、結果的には九年間もの低迷状態が続いてしまつたことになりました。

しかし、「継続は力なり」とはよく言ったものです。細々とでも根気よく続けていたからこそ、かかしコンテストにつながり、最近やっとイベントらしきものに何かしら手応えを感じてきたところです。

「山田のかかしコンテスト」をメインイベントに加えてからの刃物まつりは、動員力も相当パワーアップする事ができました。

かかしも、内容的には昨年をはるかに上回るレベルの高い作品の参加となりました。

現在のイベントとしての位置づけは、土佐山田町の一地域のものでしかありませんが、目標としては、高知県ユニークなイベントとして、全国の方から関心を持っていただけるものに成長できればと考えています。(土佐山田町商工会・経営指導員)

# 抬頭する若者文化

上

## 若者の演劇熱で 青年センターに異変

高知市棧橋通り二丁目の高知市青年センターが、今、「自己表現を目指す若者」の新しい文化活動の拠点として活況を呈している。

昨年十一月の青年センター祭初のイベント「演劇フェスティバル」には三劇団が熱演、いずれも固定席は満席、立ち見が出る程の盛況で大きな話題を呼んだ。

現在、センターに団体利用を登録しているのは「劇団ゆまにて」「劇団ファイト」「劇団ぶんぶんぶん」「ラストスタート」「TCW(トサ・コミュニケーション・ウェイブ)」「演劇センター90」の六団体。毎日、午後七時から九時、十時まで二・三の団体が利用しているという盛況ぶりだ。

平成元年四月から青年センター職員として勤務している杉野修主査は、「ミュージカルRYOMAの成功が火をつけたことは間違いない。平成二年になって、若者の間に急に演劇

身)等がミュージカルRYOMAで知り合った仲間を声をかけ、さらに高校演劇で全国大会を経験している追手前高校等から役者を集めて、平成二年六月二日結成した。

旗揚げは昨年の九月、県民文化ホールで「ムラタハルオでございます」を上演。七百枚のチケットも前売りで完売し、好調な滑り出し。二回目は自由民権記念館で「POISSON」花吹雪ゾンビーズ」を公演。舞台の袖がないためにスピーディー

な展開ができず、何かと苦勞の多い舞台であったが、観客の反応は上々で大いに自信を持つ。今回は、今年三月二三、二四日と青年センター体育館で伊藤由美子の「風の牛若丸」の公演を予定している。

「芝居をやっている痛切に思うことは、とにかくホールが少なすぎるということ。以前やっていたころでは、どのホールでやるかが問題であったのに、ここ(高知)ではホールがとれないことが大きな問題。高知の文化水準が低いと言われる原因の一つではないか。踊りや芝居をやっている人間が、気軽に発表できる場(文化ホール)の建設を一日も早くお願いしたい。」と語る制作スタッフの声は団員共通の切実な願いでもある。

今、在籍劇団員は二七名。練習は毎週火・水・金・土の午後六時から十時まで。公演二カ月前からは日曜を含めて毎日という厳しさだ。

### 〈劇団ファイト〉

デザイナーの田中光雄君がタウン誌で呼び掛けてつくった素人ばかりの異色劇団。彼は県立清水高校卒業



演劇フェスティバル「花吹雪ゾンビーズ」の舞台

人はかなりいる、ただ活動の場がないだけだと自信をもった。

高知は高齢者県といわれ、県も人もみな高齢者の方にばかり、目が向いている。でも、高齢者を支えるのは今の若者。もっと若者が喜ぶ施策を真剣に考えて欲しい。

夏のように祭りで、あれだけパワールを見せた人間が日常はすっかり沈んでしまっている、本当に勿体ない話だ。それにしても、あの『ミュージカルRYOMA』をなぜ続けないのか。あれだけの若者の盛り上がりをもっとそのままにしておくという関係

がたい。故に京都で私は高知県人であると胸を張っている次第である。

文化という言葉定義することは中々むづかしいと思うが、ある事典では「土地を耕すというラテン語が語源で、人間の手が加わっていない自然と対置される。これが

者の気持ち理解できない。

昨年の演劇フェスティバルでは、参加した劇団の中では、はつきりいって一番下手だったと思う。全くの素人ばかりで、練習時間もなく、満足いくものじゃなかった。でも良い経験になった。

ファイトのメンバーは今十一人。週三日(火・木・土)の午後七時から九時三十分まで、青年センターで基礎訓練を行っている。何をやるにしても基礎が大切だから。青年センターは無料で使えるから非常にありがたい。でも、いまでも

文化財であろう。

昨年のこと、丁度、日曜市を見物するころができ、中程の店で懐かしい黒コンニャクと蕎麦粉を注文した。代金は二千拾円。小銭の持ち合わせが無かったので端数拾円を借切ったところ、農業で鍛え上げたら

い赤銅色の老人が、折角包んだ新聞紙を即座に破って、コンニャク、蕎麦粉を元の場所に戻し「値切る客には売らん」といって睨みつけた。

私は言葉も出さず、その店を離れたが、歩きながら不愉快な気持ちを整理してみた。も

## 日曜市 大西健一

観光文化都市・京都市に五十年近く住んでいると、歴史とか文化といった話を絶えず聞かされる。建都千二百年を間近に迎えている京都市は、今なお、伝統産業が文化面の力を発揮している。

京都人の性格は、私見であるが、自分の考えを相手に合かし温厚なお公卿さんといったタイプが多く、黒潮で育った土佐人気質とは正反対である。人間性に点数をつけるとなると、ふるさとであるという付加点も含めて七対三くらいで土佐人に軍配を揚

最も広い意味での文化であり、さらに進んで人間の精神や能力や技術が、教育や訓練で洗練された状態をさす。」と説明している。このような判断で考えるとき、高知の文化レベルは決して低くはないと確信する。三百年続いている日曜市の如きは自慢出来る

場所の取り合いをするくらい過密。一日も早く手軽に使える練習場が欲しい。

情熱、夢、希望——それらがすべて集約されたものが演劇。東京からの天下り文化を拒絶し、高知の高知らしい劇団をつくっていききたい。」

三カ月前の公演に向けて、彼はファイト満々。演劇にかける彼の話は尽きない。

彼のような若者が、いま、この高知に新しい動きをもたらし始めている。

し京都であれば「すみません、ギリギリの値段ですよってまげられまへん。堪忍な」と多分言つてであろう。しかし、ギリギリの値段は商売用語ではありがちで、考え方によれば高知の老人の方が心を正直に伝え、その頑固さが反って素朴に感じられ、この様な飾り気の無い人達によって三百年もの長い歴史の日曜市が存在しているのだと独りて納得した。

ともあれこの日曜市にも大勢の観光客が訪れている現在、販売のマネーも研究して観光誘致の一翼を荷なって頂きたい。

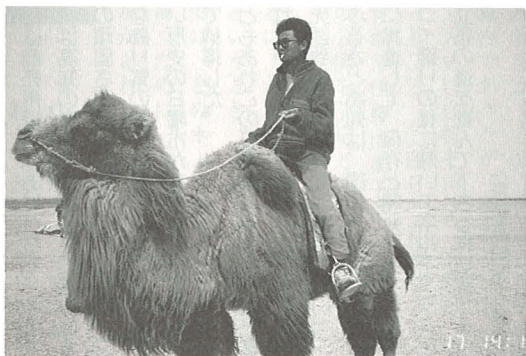
ふるさと高知は、国民休暇構想を積極的に推進して、保存と開発両面で真夏のヨサコイ踊りの様に熱いエネルギーを注ぎ込んで立派な道を進んで下さる様切望する。

(京都高知県人会会長)

# タクラマカン砂漠をゆく

## 下 旅の終焉・そして……

岩松弘記



わが愛駝「桂号」と

3月29日、午後10時。疲れたので早めに寝ようと思ったが、我が小隊の駝使の老魯が来て、駝使の酒宴に連れていかれる。老魯は、親切心からやって来たのであるが、彼らが飲む酒は、アルコール度が50度を超える白酒（パオチュウ）という、アルコールのかたまりのような蒸留酒である。これを、日本のおちよこのような小さな杯で飲む。一杯で体がカッカとほてってくる。酒のあまり強くない私には、この酒は少しきつすぎるので、あまり歓迎したものではないが、折角の老魯の心配りに、私は喜んでついていった。

親指以外の四本の指。この出すマークを覚えるのは簡単だが、勝敗関係を理解するには少々時間がかかった。もちろん、そんな酒宴の場であるから通訳の人もいない。そこで私なりに必死に考えた。というのも、このジャンケンをしてどちらか一方が、酒を飲まされるのである。で、何故かは知らないが、私はやる相手やる相手に飲まされ続け、よく判らないうちに杯を重ね、やっとその勝敗関係が判った時には、すっかり出ま上がってしまった。では、その関係とは？

説明が長くなるので、先述の一番目をA、二番目をB、以下アルファベット順におき、五番目をEとする。AはBに強く、BはC、CはD、DはEに強い。EはAに強い。EはAに強いのである。しかも勝敗関係はこれだけしかない。これ以外の組合せの時は、絶えずあ

いこなのである。さて、何故私が酒を飲まされたかについてだが、このジャンケンはどうやら勝った方が酒を飲むらしい。これでは、勝った者が負けのような印象を受けるが、駝使の達人は、えてして酒が強い。それに寒いから、酒を飲んで体を温めたいので、勝った者が酒を飲む権利が与えられるという論理らしい。このようにして、お酒一つ飲むのもゲームにしてしま

3月30日、午後2時半。道端に何か動く物体があるのを見つけた。駝上にいるので詳しくは判らなかつたが、確かにあちらこちらで動いている。よく気をつけて見ると、それは何とトカゲであった。茶褐色で、体長10cm前後のトカゲがチョコチョコと動いている。しかも、トカゲを発見したこの一帯には、鹿の足跡まであった。この辺りはアルキン山脈の麓なので、水脈が地下にあるのだから

うか。他の地域よりもラクダ草が生しているようでもある。3月31日。我が小隊で、唯一落駝してしまつた私が、今日ついに落駝してしまつた。私の愛駝「桂号」は気が優しいので、今まで一度しか暴走したことがなかつたのだが、今日は何に驚いたのか「桂号」が不意に竿立ちになつた。手綱を必死に引っ張って態勢を立て直そうと思つたが、無駄なあがきであつた。体をさんざん打ちつけた。幸い外傷もなく大したことはなかつたが、少々残念である。

4月1日。今日からついにアルキン山脈に突入する。道というよりは沢のようなところを登って行く。足

場が悪く、状態は良くないがすごく綺麗である。ハイペースでぐんぐん上る。今日一日で五〜六百メートルは登つたであろう。

午後5時半、ラーペーチャン（拉配泉）という場所につく。ここは古代西域南道の中継地点として栄えた街であるが、今は水源が枯れ、広大な無人の荒野となっている。この拉配泉が栄えたのは、丁度、ロブノー

ルのほとり、楼蘭が栄えていた頃と時を同じくし、その繁栄振り、道の両端にある石柱等で偲ばれる。

4月3日。今朝はひどく寒い。テント内でさえマイナス20℃をわつていた。昨夜、テントシューズをはいて良かった。アルキン山脈に入ってから、標高四千メートルあたりをずっと縦走しているから、気温は下がると、気圧も低い。食事の時間にお米

が時々出てくるが、しっかりと炊けていない。気圧の影響で、沸点が下がっているのである。だから食事は自然とマントウ（饅頭）が主流となる。ただ一つの利点といえば、空気が薄い分タバコが長持ちするということである。

4月11日。ついにアルキン山脈を越えた。最高地点は、我々が通つた中では四二〇メートルであつた。三六〇度何も見えない地点まで来る。地平線だけが見える。下天は黄砂にけむつており、太陽が月のように輪郭までくつきりと見える。

4月13日。砂漠の中に、山のようにこんもりとしたものが前方に横たわつている。進むにしたがつてそれが街であることが分かつてきた。風だけが行き交う街、古代のミールン（米蘭）である。昨日、もしかしたら近くを通るかもしれないと言われていたが、まさか、米蘭遺跡の真ん中を横切るとは——。古代西域北道と南道の合流地として

繁栄した街。北に行けば楼蘭、南に行けば拉配泉

今まさに古代の要塞に立ち、万感つのる思いだ。

4月18日。ついに今日、我々の目的地であるチャリクリク（若羌）の街に入る。昨日、あと5kmぐらいの場所まで来ているから、今日は駝駝を使って、一時間と少しの旅だ。何だか早かつたような、長かつたような、複雑な気持ちだ。オアシスが見えてくる。緑に芽吹いたポプラの防風林に囲まれた色づいた美しい街。ここ一カ月半ほど、植物の緑というものを見ていなかった私達には、あまりにまぶしい。ここは、柳花が飛び交い、すももが咲き、色鮮やかに何も彼もが、春を謳歌している。我々はいかに、目的地である緑の街、チャリクリクに着いたのだ。果てることのない夢を抱いて。

この旅が私にいかほどのプラスになつたかという事は、今はわかりはしない。しかし、いつかは、この旅に出てよかつたという日が来るであらう。

私の旅は、これで終わったわけではない。いま、始まつたばかりである。他の多くの人の協力を得ながら、一歩、また一歩と歩み続けるのである。

（高知大学人文学部2年生）

※タクラマカンは、ウイグル語では「はじると出られない」の意。



アルキン山脈を登る一行

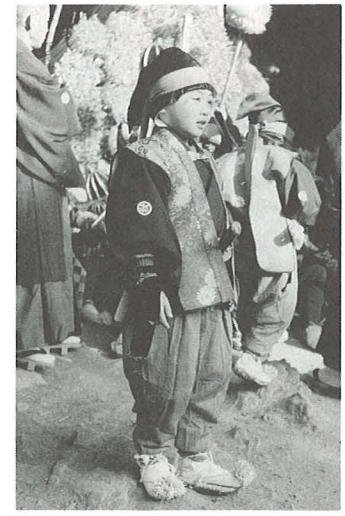


ミールンの用水路で髪を洗う隊員

# 秋葉の太刀踊り

## 高岡郡仁淀村秋葉祭

高木 啓夫



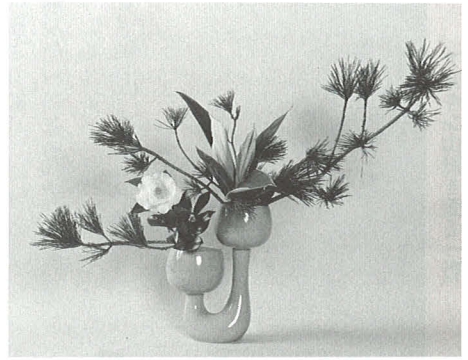
高岡郡仁淀村別枝に鎮座する秋葉神社の春祭りは「秋葉の練り」でよく知られている。それは土佐の国に早春を告げる心豊かな祭りでもある。毎年旧暦正月十六日、土佐と伊予との国境に鎮座する社殿の扉が開かれる。これより三日間にわたり行われるのが秋葉祭りであり、十八日早朝、旅所である岩屋神社を出立した行列が、市川家、法泉寺、旧庄屋中越家を経て本社にもどってくるのが「秋葉の練り」である。それもわずか三キロメートルの山径を数時間ばかりで進むのである。この練りの行列は鼻高面の先導で烏毛・羽熊・

鉄砲・神輿・台傘・鉾・獅子頭などおよそ二百人。これが袴姿・羽織袴・踊り衣裳など古色あふれる彩りをなして早春の山径を練ってゆく。この練りのなかに子どもたちの一群がある。子どもたちは紅白の紙飾りをつけた竹棒を振りながら一歩、一歩と進み、やがて二列になって竹棒を打ち合う。ほら貝が鳴り響く。この子どもたちの練りは市川家・法泉寺・中越家・本社境内といった「庭」に入ると、練りから踊り子へと役割が変わる。太刀踊りを演じてみせるのである。太刀踊りといえば県下どここの祭りでも見られる民俗芸能であるが、この秋葉の太刀踊りだけは不思議な残照が今にある。秋葉の太刀踊りを初めて見たのはひと昔、ふた昔前のことである。幼い踊り子たちが可憐な跳躍をみせては太刀を打ち合わせ、見守る参詣人

にちらりと目を走らせては踊る姿にほほえましさを感じたことであった。それから数年経って秋葉の山をのぼった。そして秋葉の太刀踊りを見た。数年前と同じ踊り子たちが、同じ動作で同じ表情で踊っている。あの時の子だな。そう思って秋葉の祭りの感慨にひたる。しかし、同じ踊り子が数年間もそのままでいるはずはない。踊り衣裳の美味は別人であるはずである。しかし、踊り子たちの顔はひと昔、ふた昔と同じように見えてくるのである。錯覚だとの思いを払いのけても、その錯覚が現実のものとなって私の心を魅了し楽しませてくれるのである。この楽しき錯覚の漂いするところは踊り衣裳にあるらしい。大太刀は裁ちつけ袴に、甲をかぶり、小太刀は振り袖姿に裁ちつけ袴をはき、頭巾の上に秋の字を染め抜いた赤い鉢巻きをしめる。そしてともに手足に足袋。つまり、全身は衣裳で覆われて、見えているのは顔だけである。その顔にほんのりと薄化粧がある。数多い県下の太刀踊りで、こうした踊り衣裳は秋葉の太刀踊りだけである。この踊り衣裳が早春の秋葉の山に独特の風情を漂わせているのである。(高知県立高知工業高等学校教諭)

# 花の生命に輝き

北村 光甫



台所で食事の跡片づけをしていると玄関の戸の開く音がし、タオルで手を拭きながら出ると中年のご婦人が待っていました。一応初対面の挨拶を終わらせた後、そのご婦人が「実は今日伺ったのは、私の事ではありません。娘にお花のお稽古を思い出して」と言い、少し間をおき「大体お花とかお茶とかはどれくらいお稽古をすれば一人前になりますか」とのお尋ね。この単刀直入のお尋ねに私はたじたじし、恥ずかしながら即答できませんでした。私自身、母の勧めで十六歳の頃に入門し、紆余曲折はありましたが、今日まで六十年近く花とかかわりを持ってきました。その間、一人前とか半人前とか一度も考えたことはなく、又、一人前とかの線引きをどこにするのかも判りません。いけばなと言えば響きがよく簡単には思いますが、いけばなとは華道のことであり、華と道の勉強、つまり修業のことです。日本ではこの「道」のつく修業がいろいろとあります。身近なところでは華道・茶道・香道・剣道・柔道・書道等々で、いずれも礼に始まり礼に終わるものです。技を磨くばかりでなく、精神的な面でも大いに学び磨かなければなりません。

ただ花器に水を注ぎ剣山を置いてそれに花を挿すだけなら誰にでもすぐできますが、私もが活けている花は、美しさのために活けるのではなく、必ず目的がありその目的のために苦心をして活けているのです。大きくはステージ用や色々の催しの展示場、式場、職場、病院、床、書斎、子供部屋、玄関等々、その場その場にふさわしい心のこもった花を、たとえ一輪挿しであっても、限られた花の生命を尊び、大切に扱う心配りがあれば、活けられた花の姿は一段と輝きを増します。このような花に出合った人達は、きつと感動し、更にあの花のように凛として人生に花を咲かさねばと、勇気さえ湧いてくるでしょう。これは古来、日本人誰もが、雪月花をこよなく愛し続けてきた、その心の底を流れる生活感情ではないでしょうか。一昔まえ、春夏秋冬、野原や川原に足を伸ばせば、そこには自然がいっぱい、人の背丈程のススキが伸び放題、竹藪をつたう野葡萄の紫色の実が宝石のように輝き、青空高く桑の木の下に真つ赤な烏瓜が鈴なりに下がり、虫の声も様々で飽きることはない自然の景色の中、花材はいくらでもありました。しかし、現在の川原は歩道の横は



セメントの堤、堤の下はすぐ水が流れ、草木の姿は影も形もなくなりました。そこで、一寸したもので花屋さんに行かねばなりません。花屋さんも様変わりして、自然の花は少なく、横文字の花が上から下まで所狭しと並びます。輸入品はもとより、品種改良の新しいスタイルの花も一杯です。先端技術による大量生産で昔は高根の花だった洋蘭のカトレヤ、デンドロジウム、胡蝶蘭等、今では手頃で希望が叶えられます。それはそれで喜ばしいことですが、豪華さはあっても風流には程遠い感じがします。この間、友達の家に行って庭を散策したとき、垣根のそばでどうにか立ち上がり、強い風をよけて僅かな日の光を追いつつ、一所懸命咲いている寒菊を見つけ一枝もらい、竹籠にさしました。凡そ、人工では味わえない風情が漂い、思わず合掌したことでした。(華道協和会理事長)

# 裏 炉 囲

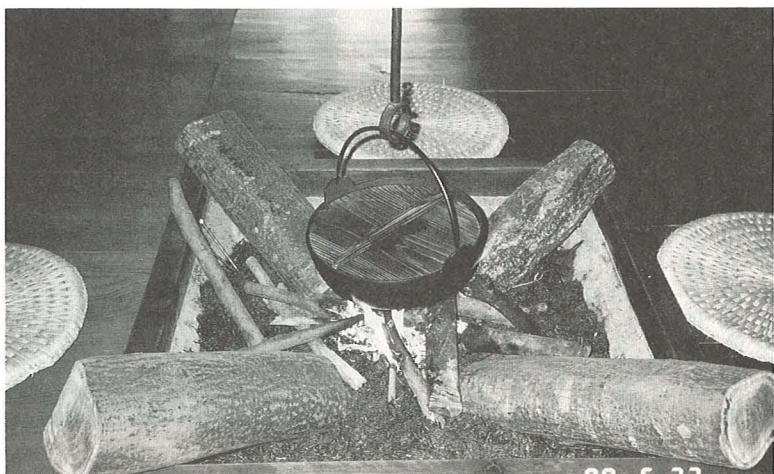
坂本正夫

昔の農家には必ず囲炉裏があつて、家族はそのまわりに集まって一家団樂していた。食事をとり、藁仕事や針仕事をすることも、子どもが眠たい眼をこすりながら、おばあさんからお化け話を聞いたのも囲炉裏端であつた。

土佐ではこの囲炉裏をユルリ、ユルイ、イルイ、イユイなどと呼び、カマドの役割をつとめることもあつたが、普通は湯茶や汁物の鍋をかけて沸かすのと、冬季の暖をとるために使用していた。戦後は新しい生活様式が普及して囲炉裏は漸減し、昭和四十年ごろからはほとんど見られなくなつた。

囲炉裏の太さは大体三尺（約一米）四方ぐらいで、中央の火を焚く所をホクボ（火窪）、炉の周囲の木枠をホーダテ（火立て）、ロエン（炉縁）、ロブチなどと呼んでいた。いつも炉にくべておく太い丸太材をクンゼ、スマキ（隅木）などと呼んでいたが、大歳（大晦日）の晩から正月にかけて焚く櫛のクンゼは福クンゼとか節クンゼといい、「正月三日間は消すものではない」といわれていた。囲炉裏の隅には火吹竹と火箸が置いてあり、天井からは自在鉤が吊るされ、いつも鉄鍋か茶沸かし用の鉄びんが吊るされていた。

家庭生活の中心であつた囲炉裏の



高知市一宮・関川家の囲炉裏

まわりは、家族員のうち誰が座るかという座席順が決まっていた、どこへでも勝手に座ることはできなかった。たとえば高岡郡梶原町宮野々では入口から見て正面左がキヤクザで家長の座席、右側がワカザで主婦の座席、手前はオモチザ（マエザ）で子どもの座席、正面奥はハンドザで水を入れた大きなハンドが置かれていた。香美郡物部村中番では正面奥

が戸棚、左側がカミザで家長、右側がシモザで主婦の座席、手前はマエザで子どもの座席となっていた。座席の位置は地域や家屋の構造で異なり、座席名にもいろいろなものがあったが、どの地域でも誰がどこに座るかという位置は固定しており、幡多地方には「猫と馬鹿とはカミザに座る」という俚諺があつた。このような茶の間の座席順も囲炉裏が炬燵、飯台に替わり、テレビが普及するようになって忘れられてしまった。

屋内で大切な神さまの一つがヒビセキサマ（火の神）であるが、この神さまは囲炉裏にいと考えられていた。高岡郡佐川町黒岩では新築の家最初に持ち込むものがモエサシ（火のついた薪）または炭火であつたというが、これは火の神を迎え入れる心意を表したものであつた。

親はいつも子ども達に、「囲炉裏にツバを吐いたりホコリを捨てたり、囲炉裏端で爪を切るなど不浄なことをするな」とうるさく注意していたが、これは囲炉裏が火の神のいる神聖な場所だからであつた。

（高知県立小津高等学校教諭）

立志社発祥の地、東九反田公園に憲政之祖國と彫った巨大な碑が東に向けて立っている。青年時代に民主主義日本の建設を目指し、文字どおり身命をなげうって自由民権革命をたたかった人たちの建立である。

一九三六（昭和一一）年にかつての民権家たちが九反田の大松閣に集合し、大松倶楽部の設立を話し合った際、板垣退助旧邸の保存が話題になつた。

板垣が民権期に住んでいた潮江新田の邸宅は、山内藩主の釣御殿だったが、戊辰戦争の戦功の賞に殿様が板垣に与えた。県内県外の民権青年たちはここに板垣を訪ね、政談、政略を練つた。

西郷隆盛が政府打倒を目指して熊本鎮台を包囲したとき、土佐の士族を西郷軍に呼応させようと、杉田定一、鳥居正功、藤田莊之助、岩沢仲道の一行がはるばる土佐に入り、激烈な演説をぶって武装蜂起を煽動していたのだが、植木枝盛の紹介で彼等が板垣と会見、その結果武装蜂起から民権運動に転換した。その場所がこの板垣邸だつた。

板垣は反民権家につねにねらわれていたから、枕もとに大小二つのピストルを置いていたというし、この邸宅には寝室から台所に通ずる抜道がつくられていたといわれている。

板垣が東京に転居後、この由緒ある建物は高知棧橋に移築され、料亭見晴楼として使用されていたのだが、大松倶楽部の人々はこれを遺憾とし、その保存を検討していた。

六月に水野千鶴がその敷地四五〇坪を高知市に寄贈した。これが現在の東九反田公園である。

## 生き続ける自由民権 ④

# 「憲政之祖國」碑

外崎光広



日落成式を挙行し、憲政記念館と命名した。憲政記念館と称する建物は、国会議事堂と向かい合っている衆議院事務局が管理する施設と東九反田のこの施設だけだろう。

開設された国会が百年を迎えて、国が主催する大規模な記念祝賀行事が行われ、新聞や放送も頻繁に取り上げるにぎやかさが続いている。その世相を九反田から凝視する「憲政之祖國」の感慨には計り知れないものがあるにちがいない。

民権運動に追いつめられてガケツブチに立たされた明治政府が、その矛先をそらすために一八八一（明治一四）年一〇月一二日に突如天皇の詔書を出し、一〇年後に国会を開く、憲法は朕（天皇）が制定する、これに不満をとるものには刑罰を加えると宣言した。土佐の民権派は自分たちの要求とあまりにもかけ離れたこの詔書を批判して処罰を受けた。それにしても国会開設の約束を取り付けたのは民権運動の成果であつた。それを記念し、誇示するのがこの碑であり、「自由ハ土佐ノ山間ヨリ発シタリ」という植木枝盛の言葉とともに、お国自慢である。

国会百年は決して光輝だけではなかつた。一九四〇（昭和一五）年二月、斉藤隆夫議員が戦争反対演説をしたため、彼は除名処分を受けたのであつた。

（松山大学教授）

# 山のある風景

片木太郎



森ノ鴻の手帖

家を出て畦道を少し歩くと、枯草の土手へ出た。土手の上に立つと、鴻ノ森が田んぼの向うにあった。久万川の支流の紅水川というかわいら

になる。今、紅水川の道は鴻ノ森へ真っすぐに向かう最後の二百米ばかりの道にだけ、昔の面影を残すようになっていた。

鴻ノ森をかけた油絵作品はない。山は大きくて、私には手ごわいからだ。曾て、南フランスのエクス・アン・プロヴァンスへの道、夕暮れる車窓からひとり、サン・ヴィクトアルの赤い山形を見つけた時の心おどりがよみがえる。セザンヌの山は明晰な形の岩山で、近年の開発で山としての魅力を失って行く鴻ノ森を並べるのは無理である。しかし、せっかくこの山の近くに住まわせて貰っているからは、いくら手ごわくても、これを絵にかかないという手はあるまいと、近頃は思う。

しい名の小川が流れていて、人ひとりふたりが歩くほどの草の道が続いていた。そこに住むようになって三十余年

下ったりしつづ行く。時には、山モデルに、手帖をボールペンで引っかいたりするが、アトリエからあの山が見えていた頃の小品一点のほか、

子供達が幼かった頃、元日のくら闇を家族して登った山、遠足の時、頂上で生徒達と手製の土佐風を突風にかけて、喜びおろげた山だ。また、百年に一度と言われた集中豪雨の時は、その山肌を滝ではないかと思われ程の水が駆けくった、と見る間に、紅水川の土手に水がふくれあがり、忽ちに我が家が床上浸水になった怖い記憶の山でもある。私にとって、西洋は見果てぬ夢だ。いまだに古いスケッチの切れはしを引っぱり出して絵をかく。それもまた良しとして、自身のかたちをふくめて、身辺の対象を、新しい目で見つめたい。鴻ノ森は私の大事なモチーフである。

(画家)



—高知の映像コンテスト入選作品—

## 高知を撮る 新荘川の風物詩 田中 一郎

どれだけの距離で、人に対するのがいいたろうか、それを考えるときがある。

たとえば欧米人は、親愛の表現として、まず握手や抱擁をすることによって、両者の間のへだたりをとり除いておいて、やおろ相手との距離を取っていく。

それに比べて私たちは、はじめにある距離を取っておいて、次第に親しさを深めることも、距離を縮めていく。

「なれなれしさ」への距離の取り方が、欧米と日本では逆になっているのだ。しかし、そこに、零に近いところからある間隔までの距離が、間合いとしてとられていくことは確かである。

この間合いの取り方に、人はどんな気配りをしているのだろうか。家族の間でも、友人関係でも、ただ親しければいいというものではないし、ましてや他人との関係になると、間合いの取り方が重要になる。対座するとき、話すとき、共に歩く

### 間合い



とき、並ぶとき、その間合いが気になる。人間関係だけでなく、何かをするときの器物と人のポジションまでを含めると、人と人において、また人と物において、もっとも好ましい位置や間合いというものがあるように思う。形に現れるものだけでなく、話の聴きようなどにもそれが

ある。たとえばあいつちひとつにしても、こちらが深い思いをこめて話しているのに、すくなく「よくわかりました」というような返事をされると、その人の才知に感心するよりも、「そんなに簡単にわかる事柄でもないし、またそんなに簡単にわかつてもらっては困る」と思うのである。

もちろん、はじめから話の通じない相手では、間合いのとりようもなく、なにを求めても無駄であるが、考えてみると、間合いとは、単に時間や距離における「間」のことをいっているのではなく、もっと文化の本質にかかわっている問題ではなからうか。

(中)

リアリズム・写真と穿ち

奴田原紅雨

昭和四十八年、高知新聞の学芸欄「高知柳壇」の選を担当していた頃、投句者の一人でもある室戸中学校教諭の菊井一二三氏と二人で、同年二月一日柳句会を発足して、そのうち二人が五人になり十人になり「高知柳壇」柳友の応援もあって同年十一月柳誌「しつとろと」を創刊。A五判一八〇頁。誌代二五〇円、年間三〇〇円。毎月第一土曜日には室戸市民図書館で月例会も開いている。「しつとろと」の編集から発行までまかせていた菊井一二三氏が平成元年五月十二日急逝してからは、小野喬秀、山崎酔客の両氏が編集に当り、川柳自由詠「潮騒」作品の選は奴田原紅雨が担当して、会員五十余名が作品を発表している。ほかに随筆「道草」を毎月山崎酔客が執筆して好評を得ている。また「光彩集」や「私の感吟」など前月号からの佳作推薦欄がある。



表紙裏の「潮騒散策」は毎月小野喬秀が前月号の句評を担当している。

柳誌「しつとろと」

新しい刺激に挑戦

長江 貴世

生まれたのは一九八五年の冬でした。当時のNHK高知放送局長とお知り合いだった故堀満子さんの肝煎で、NHKの一室をお借りし、県内の障害者へのボランティア活動が始まりました。グループの名を「あめんぼ朗読会」と名付けました。これは、発声練習に使う北原白秋の「アイウエオの歌」の最初の行から取ったものです。

朗読は月二回開き、一回目は教材を用意しての勉強会。皆で批判をしあっています。二回目は、それぞれ読みたい本を選び、テープに少しずつ吹き込み、これも皆で批評しながら進めています。遅々として進まない日々もありますが、只今完成しているテープは、須崎市の図書館に七六巻ほど寄贈しています。

又、昨年九月、教材に使用した高橋治の「風の盆恋歌」にひかれて富山の八尾に研修旅行もしました。煽々と泣く胡弓の恋歌や、しなやかな静しさを



高知三曲協会

伝統の継承と未来を拓く三曲

田島 虚山

三曲とは上方唄・箏曲等において三弦・箏・尺八等三つの楽器を用いて演奏することで、正しくは三曲合奏と呼ぶのであるが、現代ではこれ等の邦楽器を用いて行う邦楽演奏を総称して三曲演奏と言っている。



治年代箏曲では宮城道雄、尺八では中尾都山の出現によって、楽譜の整備や楽理の確立が行われると共に、三曲も次第に近代化し、現在では洋楽に匹敵する音楽性を見える様になって来た。高知にも昔から箏三弦の師匠或いは尺八の師匠は何人も在任しており、それぞれが弟子の育成をしていたが、当時はそれらを総括する組織はなく、それぞれの流派毎に生田会(箏曲)都山流幹部会と言った様な会があった。それが昭和十六年に都山流五十五周年を記念する演奏会を流祖中尾都山を招聘して行っており、戦後、昭和二十

四国二期会高知支部

土佐オペラ「純信・お馬」に取り組み

向原 寛

四国二期会は、声楽全般、特にオペラについての研究及び発表活動を通じて、地域の音楽文化向上に寄与することを目的に、昭和五十八年二月に発足しました。四国各県に支部があり、通常はそれぞれが独自の活動を行っています。

高知支部は、オーディションに合格した十七名の会員で現在組織されています。発足以来、多くの研修会や演奏会、オペラなど多くの公演を、広く県内で行ってきました。その中でも、昭和六十二年に上演したオペラ「あまんじやくとうりこ姫」は、土佐人の手による初めてのオペラとして大きな反響を呼びました。その後、このオペラは春野町、夜須町、土佐山田町と、次々に各地で公演し、大人から子供まで、楽しくわかりやすいオペラであると好評を博しています。



「オペラは、楽しく誰にも親しまれ、わかりやすいものでなければなりません。」これが私たちオペラ活動を推進する四国二期会高知支部の

表題の「しつとろと」は、魚の供養と魚招きを兼ねて漁師たちが旧暦六月十日に、室戸の神社仏閣を早朝から一日中回る奉納踊りで高知県保護無形文化財に指定(昭和三十八年七月五日付)、文化庁の「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」に指定(昭和四十九年十一月)されている。

踊りの余韻に魅せられて、そこにもう一つのグループ「朗読風の会」が芽吹きました。このグループはあくまでも趣味としてどこまでも遊びとして「大人の女」を読もうと、ちよっと洒落てみたのです。そして十一月に立原正秋の「最後の仕舞」の小さな発表会も催しました。こうした出来事が黙々と録音を採り続ける地味なボランティアの方法への刺激になれば……などと思っています。

連絡先 室戸市室津二五一  
奴田原紅雨方  
電話 〇八八七二二一〇六七九

三年には都山流・琴古流の合同演奏会が弦方各流派師匠の協力を得て行われています。昭和三十年代に至り、全国各地に三曲界を総括する組織が誕生する様になり、高知においてもそれに時を合わせ、高知三曲協会が生まれたのである。

モットーです。このモットーを生かした本格的オペラ——よさこい節「純信・お馬」——がこの度、私たちの企画で創作されました。

連絡先 高知市上町一三三六  
川野 哲彦方  
電話 〇八八八七二二〇一一



高知市江の口川、弥生町の一文橋のすぐ東に[3]という字が12も並ぶ珍しい地点がある。東経133度33分33秒・北緯33度33分33秒のこのユニークな場所を記念し、昭和37年、高知ロータリークラブが建立した「地球33番地」のモニュメント。今年(平成3年)3月3日、この地点で電話百年記念事業の一環として「SUN(33)SUNフェスティバル」が計画されている。

風伯

挿話一件

いきつけの喫茶店でよく鉢合わせする女性がいる。四十幾つかのオバタリアン、じゃなくて、イバタリアンがはやくも威張っている……(甲高い声、耳障り、はなはだし)「出掛けようとしたら、車のセールスが来てね。話が長引くとまずいから、その場で決めちゃった。百二十万円、うちはこれで三台目よ」「そう、えらいわ……」相槌を打つのは、同じ年格好の女性。濃いルージュ。奇抜なイヤリング。厚化粧。一見して家庭におさまりそうもないタイプ……。「あなたの旦那は、甲斐性があるからいいけど、うちのテーヤン(亭主)ときたら、た

だ息をしよるばアのオトコヤから、苦勞の山……もう離婚しようかしら……」「……」「……」コは選りどり見どりよ」「……」『どう、このスーツ、似合うかしら。十二万円よ、きのう見立ててキャッシュで払ったの……ローンはいやだから……』コーヒの味がまずくなった。私は早々に退散した。それから半年後……。イバタリアンは、五位鷹のように、どっかへ飛んでいったそう。そう、彼女は、サ・ギ・シ。つまり詐欺師。いや、正確にいうと、詐欺師の落ちこぼれだった。註記・毎朝新聞社発行「痴恵袋」384ページ参照。(サワシ) 拝金欲惚け族に寄生する虫。対症療法は、甘い汁を吸い飲もうとしないこと。(芥)



募集中

募集中

募集中

## 高知出版学術賞

優れた学術研究の振興は、文化や出版の向上のみならず、広く高知県の発展に貢献するところが大であると考えます。

「高知出版学術賞」は、当該年度における最も優れた学術出版を顕彰することによって、学術研究の振興を図り、県勢の進展に資するものです。

〔対象〕 ① 高知県内に在住する者の学術的著述、または他県在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述であること。

② 平成2年（奥付の日付による）中に発行したもので、書冊としての体裁を備えた単行本であること。

③ 財団法人高知市文化振興事業団内の審査委員会に推薦されたものであること。

④ 重賞は妨げません。

〔推薦〕 どなたでも推薦できます。自薦・他薦を問いません。推薦図書名、著者・編者氏名、出版社名、推薦理由、推薦者の住所・氏名・電話番号を記した推薦書に、該当図書2部を添え、審査委員会へ提出のこと。

〔受付〕 平成2年12月10日～平成3年1月31日

〔表彰〕 ① 3点以内とし、それぞれに賞状と賞金10万円をります。

② 表彰対象者は、著者または編者となります。

③ 表彰は3月下旬に行います。

## 第7回高知市都市美デザイン賞

受付締切：平成3年1月31日

事業団では、街に個性と調和をもたらしている優れた建造物を広く知ってもらい、より美しいまちづくりを進めるよう「高知市都市美デザイン賞」を選出しています。身のまわりで、街の美観や景観づくりに貢献している建物・モニュメントなどを推薦してください。

〔対象〕 平成2年1月1日から平成2年12月31日までの間に高知市内で完工した建築物や建造物。

〔推薦〕 どなたでも推薦できます。はがきに次の事項を記入のうえ、推薦してください。一人で何件でも推薦できますが、はがき1通に1件とします。

- ① 建築物・建造物の名称・所在地・完成時期
- ② 推薦の理由
- ③ 推薦者の住所・氏名・年齢・職業・電話番号

〔表彰〕 特賞1点・入賞2点（該当のものが無い場合、変更することがあります。）

〔送り先・問い合わせ先〕

〒780 高知市本町5-2-3 電話0888-73-4365

高知市文化振興事業団「都市美デザイン賞」係

## 第7回高知の映像コンテスト

写真 応募締切：平成3年1月31日

〔テーマ〕 「高知を撮る」

記録性を持った古い写真から、高知のいまをとらえたものまで、高知に関する写真であれば撮影の対象を問いません。

〔応募〕 \*どなたでも、一人何点でも応募できます。  
 \*作品は4ツ切り以上、発泡スチロール貼りで。（ただし、古い写真はこの限りではありません）  
 \*組写真は、3枚組までとする。  
 \*作品1点ごとに、裏面に応募票を貼付のこと。  
 \*応募にあたっては、著作権法に触れないようご注意ください。（特に古い写真の場合）

〔賞〕 特選 2点（賞状と賞金5万円・副賞）  
 準特選15点（賞状と賞金1万円・副賞）  
 入選 100点以内

〔作品展〕 2月27日（水）～3月4日（月）  
「とでん西武」で開催予定。

〔応募先〕 高知県カメラ商組合加盟店・フジカラープリント取扱店または高知市文化振興事業団へ持参または郵送のこと。

財団法人 高知市文化振興事業団

〒780 高知市本町5丁目2番3号

TEL(0888)73-4365  
郵便振替 徳島 8-14869